

学生と養護老人施設におけるボランティア

増田 榮美

1. ボランティアの意義

大学全入学時代を迎え、地方の高等教育機関にとっては大変厳しい時代の到来といえることができるであろう。そのような中生き残っていくためには様々な努力が必要であるが、中でも地域社会とのつながりを大切に、社会貢献をしていくことは大学の重要な役割のひとつと考えられる。地域社会に受け入れられることで大学の必要性を感じてもらい、同時に活用してもらうことができるからである。方法は様々な考えられるが、大切なのは学生が中心となって関わり地域社会に溶け込むことであるため、いちばん関わりやすいボランティアが適切であると判断し実行することとした。地域社会と世代を超えて交わり、何らかの形で社会貢献することができたということを実感することで学生も成長することができるであろうし、何よりも、地域の方々に学生たちの姿を見てもらういい機会となる。

そこで、今後も継続して行うことができることを前提に、養護老人施設でのボランティアを企画することになった。今回は初めてということもあり大卒は教員が提案したのだが、詳細については、卒業記念の研究成果発表会を兼ねてプライダル研究会の学生たちに企画してもらうことにした。

観客となる入居者の年齢は70～80代が中心で、この世代の婚礼衣装は和装であり、ウェディングドレスの文化がなかった時代である。また、中には婚礼衣装を着ることができなかった方も多いのではないかと考え、ウェディングドレスを着用する“プライダルショー”であれば喜んでいただけるものと考え提案する運びとなった。

2. ボランティアを始める前に

ボランティアをするためには、受け入れ先の施設に活動の理念や活動内容についてご理解いただき、その必要性を感じてもらわなければならない。さらに、短期大学生が中心となって企画、運営することについて、信頼していただくことが欠かせない。そのため、受け入れ先の老人ホームと、活動の目的、内容、時間帯、場所の設定などについて話し合いを重ねた。特に、お年寄りを対象にするため、体に負担にならないよう配慮することが大切で、時間帯やショーの時間（長さ）などは慎重に決めることにした。幸い、主旨について理解していただき、快諾してくれたため、早速準備に取り掛かることができた。

学生たちには、老人ホームでのボランティアであることを前提にし、如何にお年寄りに喜んでいただけるかを頭に入れてショーの内容を考えるように指導した。また、2年生にとってはこれまでのサークル活動における研究成果を発表する場であり、その成果を存分に発揮し1年生に伝えられるように工夫することを課題とした。

3. ボランティア活動の内容

平成21年2月5日(木)に、上田市赤坂上の老人養護施設、敬老園内にある報恩寮にて、ウェディングドレスショーを行った。参加学生は18名で、そのうちモデルは7名、それ以外は司会や音響、証明、会場係、ブーケ制作、ヘアメイク、着付け、ディレクター等、全員が重要な役割を担った。

「エレガント ローザ ウェディング」と名付け、それぞれ違ったコンセプトを掲げた6つのシーンからなるショーとなった。ショーのフィナーレでは、ブーケとブートニアの由来に因んだ演出を行い、研究の成果を遺憾なく発揮した。

4. 学生の様子

特徴的だったのは、1年生と2年生が交わらないということだった。そのため初めは、2年生ばかりが企画し、1年生の意見が反映されていないようであった。2年生がリーダーシップをとりきれていないことや、意見の集約が苦手であることも原因のひとつであると思うが、世代の特徴として異年齢間の交流が苦手であることが考えら

れるのではないかと感じた。話し合い以外の場面であっても、学年ではっきり分かれており、作業であっても、雑談であっても交わっている姿が見られなかった。

しかし、限られた時間の中で企画しなければならなかったため、問題が山積し始めると、学年ごとに分かれて作業をすることが非効率であることを悟り、自然と全員が学年を超えて協力体制を作っていた。大変もどかしくはあったが、あえて口出しをしなかったことで、自分たちの責任の重さを感じ、自ら考え行動するようになっていったように思う。

もう一つの世代的特徴として感じたことは、自分で考え答えを導き出すことが苦手だということである。わからないことがあると直ぐ人に尋ね答えを教えてもらおうとする。ヒントを与えても自分で答えを出そうとせず、こちらからの回答を待っているのである。例えば司会台本についてであるが、どのような文章にするか例文を言葉にすると、一言一句書き取ろうとしている。自分で考え、答えを生み出すことができないのかもしれない。わからないことを質問されれば直ぐに答えを教えてしまったり、授業時間の関係で生徒に考える時間を十分に与えることなく回答してしまったりと、そのような家庭や学校での対応が、少なからず影響しているものと推察する。少子化であるが故に、家庭では子供を大事にし過ぎる傾向が懸念されているが、そのような生育環境がこういった世代的特徴を生み出しているのではないだろうか。

ブライダルショーの内容自体は、全てを任せたことで皆が自主的に動き、学生同士が活発に意見交換をしながら意欲的な取り組みができたことは評価に値する。

ショーの中のひとつの場面で、観客席にキャンディーを投げながら入場するという演出を予定していたのであるが、意見交換をする中で、若い人と違ってお年寄りには身をかわすことができないため顔に当たったら痛いのではないかと、という指摘があり内容を変更したり、ブーケスについても車いすの方の立場に立って演出方法を考えたりと、お年寄りが対象であるということにも、最大限の配慮ができたのではないかと考える。

2年生の部員が圧倒的に多く、人数的にも能力的にも今後の1年生の活動が心配であったが、今回のボランティアをきっかけに、1年生が自主的に研究会への勧誘を行って部員数を増やしたり、当日のお手伝いを探してきたりと、やる気と共に頼もしさ

が加わり大変成長できたと思う。

5. おわりに

今回、ボランティアを受け入れてくださった施設に心より御礼申し上げたい。当日はスタッフの方々全員にご協力いただき、また、観客としてショーを見てくださった。お陰で大変盛況となり、学生にとってはなによりの励みになったであろう。学生自らが楽しんでできたことも成功のポイントであったと考える。

観客のお年寄りの中には、自分の結婚式を思い出す方や、孫の結婚式に出席できなかったためにその姿を投影したりする方がいるなど、様々な形で感動してくれたようである。

施設責任者の方の話によると、幼稚園児や小学生との交流はあるものの、それも年に1～2度程度であり、ましてや大学生となると全く交流がないとのことである。それだけに、大変喜んでくれただけでなく、今後も様々な形で交流を図りたいとの申し入れがあった。

また、ボランティアをすることになったことで、なにより、学生に自ら考える力を呼び起こしてくれたと思う。さらに、完全に任せることで、考える力のみならず、意見交換の仕方や意見の集約をするといったコミュニケーション力もついたように感じられる。

終了後、片づけをしていた時、入居者のひとりが手作りの壁かけを持参して尋ねてきてくれた。大変感動したので受け取ってほしいとのことで、学生の人数分を用意してあった。学生は思いもかけない贈り物に感銘を受けた様子で、涙を流して喜んでいった。自分たちの企画したことで、喜んでくれる人がいるということがわかったことは、大いなる成果であったと考える。

昨今、核家族化の影響で、お年寄りとの接し方がわからない学生が多い中、接し方のみならず弱者への配慮等も学ぶことができ、大変貴重な経験であったと思う。これを機に、今後社会に出てからも、異年齢間のコミュニケーションを円滑に行えるのではないかと期待している。

このような地域社会との関わりを継続して行うためには、教員の後ろ盾は欠かせな

いものとする。しかしながら、今回のような提案を、教員からではなく、学生から持ち上がるように指導していくことが今後の課題であろう。

そして、養護老人施設でのボランティアが今回限りにならないよう、継続して企画がなされるような教育システムの構築をしていく必要があると考える。